

現代の男性アイドル像と〈恋愛〉／〈絆〉の様相  
——雑誌分析を通じて（2014）  
"Romantic Love" and "Bonds" of Contemporary Japanese Male Idol  
: An Analysis of Myojo Magazine (2014)

西原 麻里  
Mari NISHIHARA

関西大学社会学部社会学科メディア専攻 Kansai University of Sociology

**要旨**…本発表では、雑誌『Myojo』の内容分析をもとに、男性アイドルと女性読者の異性愛関係＝〈恋愛〉と男性アイドル同士の関係＝〈絆〉の言説について考察する。数量的分析の結果、異性愛に関する言説よりも男性同士の強い友情が頻出し、同性同士の“恋愛”とも読み取り可能な言説も一定数以上あることを明らかにした。『Myojo』では、男性アイドルたちは理想的かつ完璧な“王子さま”ではなく、嫉妬や悩みも曝け出すような生々しさをともなった姿で構築される。そしてかならずしも従来の男性＝主体／女性＝客体の異性愛規範の図式に則るだけでなく、むしろ女性が主体的に男性同士のあり様をまなざす空間が構築されている。以上の考察から、女性向けポピュラーカルチャーにおける、異性愛規範やジェンダー規範を攪乱させる可能性を指摘する。

**キーワード** 男性アイドル、雑誌分析、異性愛規範、男同士の絆、ポピュラーカルチャー

## 1. はじめに

本発表では、女性を読者対象とする芸能雑誌『Myojo』（集英社）の内容分析を通じて、〈恋愛〉と〈絆〉という二つの観点から、現代の男性アイドル像を明らかにする。

ジャニーズに代表される男性アイドル文化は、現代日本の女性向けポピュラーカルチャーのなかでもとくに大規模なジャンルの一つである。たとえば女性雑誌『an・an』（マガジンハウス）では、ジャニーズ事務所所属のタレントといった男性アイドルを「好きな男」や「抱かいたい男」として送り出している。また、ジャニーズファン文化の研究をおこなった辻泉が、女性ファンが男性アイドルと強固な恋愛関係を想定しようとしていることを指摘している（辻 2007）ほか、田島悠来も 2002 年から 2012 年までの『Myojo』の記事分析を通じて、「理想の恋愛対象として描き出されることにより、（ジャニーズアイドルは：引用者注）「女性の視線」に向けて理想化された性イメージを付与されている」、また「「ジャニーズ」と読者との一対一の「疑似的な恋愛の場」として、誌面で異性愛主義をその根底に据えることにより」「（読者にたいする：引用者注）異性愛秩序の再生産が行われている」と述べる（田島 2013, 75）。このようにジャニーズアイドルは、女性にとって理想の恋愛の相手としての役割を担うものとして認識されている。

しかし近年、とくに 2000 年代以降に人気を博している東アジア圏の男性アイドルの姿は、異性愛のメッセージとならんでメンバー同士の強い友情や信頼関係、あるいは男性同士で“恋愛”関係にあるようにも読み取れるような表現によって映しだされていることが珍しくない。その様子は“わちゃわちゃ感”と名づけられ、女性ファンから肯定的に受けとめられている。女性ファンが男性アイドル同士の親密な関係を好む様子は、陳怡禎（2014）の研究などで指摘されている。また、男性同士の関係を“恋愛”で読み換える、いわゆる「やおい／BL（ボーイズラブ）」で男性アイドルをみる欲望のあり様は、吉澤夏子（2012）、吉光正絵（2012）、Nagake Kazumi（2012）などで論じられている。このような状況を見ると、男性アイドルとはかならずしもファンが仮想する恋愛の相手というだけではない、別の機能も不可欠とされているのではないかと考えられる。

そこで本発表では、ジャニーズ事務所所属の男性タレントを対象に、雑誌メディアの言説空間における男性アイドルの描かれ方に注目する。従来の“王子さま”の役割である男性アイドルと読者との異性愛関係を描く言説と、男性アイドル同士の友情関係を描く言説、そして擬似的な男性同士の“恋愛”関係を示すような言説を考察することで、男性アイドルをとりまく女性向けポピュラーカルチャーの特徴をも含めた、近年の男性アイドル像について論じていく。

## 2. 雑誌『Myojo』におけるジャニーズアイドルと雑誌記事の分析方法

『Myojo』は1954年に『明星』として創刊した芸能雑誌で、1992年よりこのタイトルとなり現在も継続発行されている、月刊の女性ティーンズ誌<sup>1</sup>である。本発表では現代の男性アイドル像を考察するために、2012年度の一年間に発行された『Myojo』本誌（2012年4月号から2013年3月号まで）を分析対象とする。『Myojo』が2012年に創刊60周年をむかえていること、また2011年に「Kis-My-R2」と「Sexy Zone」、2012年1月に「ABC-Z」という三つのグループがメジャーデビューをしていること、活動休止状態であった「NEWS」から脱退した山下智久が単独で活動をスタートさせ、同時に4人に再編した「NEWS」もグループでの活動を再開したことなどから、現在のジャニーズアイドルの様相を分析するうえで、2012年度の一年間がもっとも適当な時期であると判断した。なお年度単位としているのは、誌面に掲載される読者像が学生であることがひじょうに多く、記事構成も学校（学年）のスケジュールと並行しているためである。

『Myojo』がジャニーズアイドルをコンテンツの中心に据えるようになったのは、ごく最近のことである。前川直哉が調査した、『明星』／『Myojo』の表紙に登場した芸能人の性別のデータによれば、1990年代後半以降はジャニーズの男性アイドルが90%以上を占めている（前川2012, 139）。しかし、本発表でとりあげる2012年4月号から現在にいたるまで、女性はまったく登場しない。記事をもても、2000年代半ばまではジャニーズ事務所所属ではない男性タレントや女性タレントが前半のページに登場しているが、2012年度の時点では、彼らの記事は誌面の中盤か後半ページに位置しており、前半はすべてジャニーズアイドルで構成されている。つまり、近年ではより顕著な形で、ジャニーズアイドルが『Myojo』の重要なコンテンツとなっていることがわかる。

『Myojo』は、読者投稿ページなどいくつかの情報コーナーを除き、大半がカラーページで構成されている。そのほとんどにアイドルの姿を映したグラビアが掲載され、同時に彼らのインタビューやアンケートなどが文章で掲載される。なかにはほとんどグラビアのみのページもあることから、『Myojo』が視覚的表現を重視していることが伺える。

そこで記事分析では、ジャニーズアイドルが登場する記事を対象に、雑誌分析の先行研究（井上+女性雑誌研究会編1989）（落合1990）（諸橋1993）（坂本2000）などを参照しながら、テキストとグラビアとの両面からアプローチする。テキストの分析では、彼らの恋愛観／友愛関係を示す言説や同じグループの〈絆〉やファンが存在を示す言説について分析する。グラビアの分析では、デートのシチュエーションといった読者との疑似恋愛的ポージング、肩を組むなどアイドル間の仲の良さを表すポージング、そして抱きあうなど同性同士での性的な接触が連想されるポージングを分析する。設けた項目についての言説がみられるかどうかを号ごとに記事単位で数量的に分析し、項目ごとに平均値を出す。この数量データをもとに、現代の男性アイドルが担う〈恋愛〉と〈絆〉との様相とアイドル像について論じていく。

## 3. 雑誌記事の内容分析

まず、『Myojo』における男性アイドルの、仕事／プライベートに関する言説の登場頻度について述べておきたい。テキスト分析の結果、テレビ番組への出演やコンサートといったアイドルの仕事についての言説がみられる記事は平均して64.1%、学校での出来事や家庭でのエピソードといったプライベートについての言説がみられる記事は平均して64.0%となった。とくにプライベートでは、学校の友人や教師との関係、家族との仲の良さをアピールする言説が多い。アイドルの“オン”の姿と同程度に“オフ”の演出がなされており、『Myojo』はアイドルの“素”の姿をみるための重要なメディアであることがわかる。

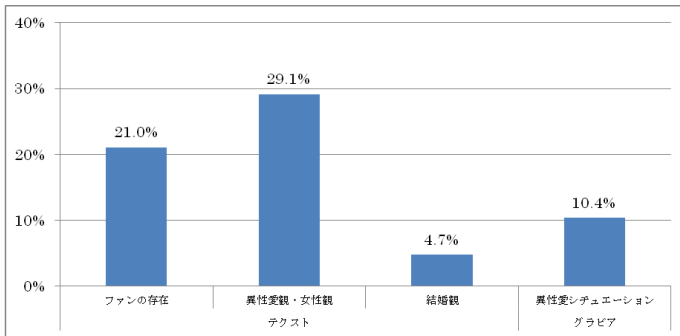
この点を踏まえたうえで、男性アイドルの〈恋愛〉と〈絆〉について考察するために、以下で「男性アイドルと女性（読者／ファン）との異性愛言説」「男性アイドル同士の友愛言説」「男性アイドル同士の“恋愛”言説」についての記事の内容分析をおこなう。

### 3-1. 異性愛言説

先述のとおり、女性ファンにたいする男性アイドルのもっともオーソドックスな役割の一つが、女性ファンにたいする仮想的な恋愛の相手である。現在の『Myojo』は女性を読者に想定しており、同時に彼女たちは男性アイドルのファンであると想像できる。そこでテキスト分析では、ファンの存在に言及するもの（＝「ファンの存在」）、アイドル自身の異性愛観や女性観、理想のデートプランなどを語るもの（＝「異性愛観・女性観」）、理想の結婚や将来の家族にたいする考えを語るもの（＝「結婚観」）の3点を、グラビア分析では読者との擬似的な恋愛関係を演出するシチュエーションやポージング（＝「異性愛シチュエーション」）を分析した。

その結果、「ファンの存在」は2割弱、「異性愛観・女性観」には3割に満たない頻度であることがわかった。また、グラ

表 1 異性愛言説 (テキスト/グラビア)



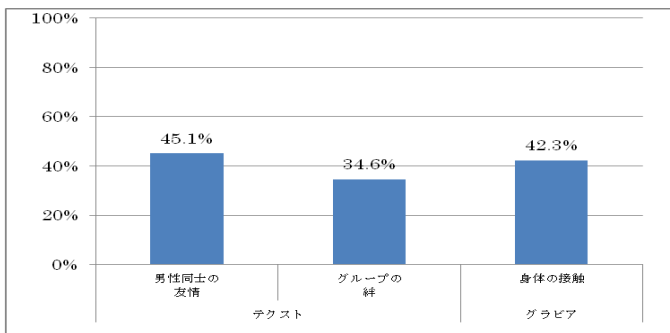
ビアの「異性愛シチュエーション」も 1 割弱であった。全体的にみて、異性愛に関する言説は少ないといえる。しかしなかには、女性読者が男性アイドルとの恋愛関係を想像できるような記事もみられる。たとえば「「一触即 LOVE」サマーバケーション」(2012年9月号、5-12ページ)では、男性アイドルと読者が「リゾートホテルで真夏の一夜を過ごすことになったら…?」というテーマで、視線をカメラに向けたアイドルたちの姿がバストアップで映っているほか、異性と二人での旅行を仮定したアンケート

についての、アイドルたちのさまざまな答えが掲載されている。雑誌記事の本編部分では、このように性的な要素を含んだ恋愛や結婚といった話題はあまり登場せず、性的なニュアンスを含んだ異性愛言説がみられる記事の多くは、雑誌の巻頭/巻末の「袋とじ」やピンナップとして配置されていることが特徴的である。

なお「結婚観」はもっとも少ないが、ジャニーズアイドルが恋愛以上に結婚が表沙汰とならないことや、誌面に登場するジャニーズアイドルの多くが 10代から 20代半ばであることが要因と考えられる。総じて、異性愛言説はジャニーズアイドルの魅力を表現するうえでかならずしも重要な要素であるとはみなせない。『Myjo』誌面では仮想の異性愛空間は第一義とされていないといえるだろう。

### 3-2. 友愛言説

表 2 友愛言説 (テキスト/グラビア)



次に、男性同士の友愛を示す言説を分析した。先述のとおり、最近の男性アイドルに関する研究では、同性間のひじょうに親しい関係がメディアで積極的に映し出されていることが指摘されている。そこで本発表では、これらの知見の再検討の意も含めて記事の内容分析をおこなった。テキスト分析では、他のグループのジャニーズアイドルやテレビ番組などで一緒に仕事をした俳優、あるいはプライベートな同性の友人についての語り (=「男性同士の友情」) と、同じグループ内での他メンバーとの関係

の強固さを示す語り (=「グループの絆」)<sup>3</sup>との 2 点を、グラビア分析では手をつないだり肩を組んだりするなど、男性同士の友情を表す身体的な接触がみられるもの (=「身体接触」) を調査した。

その結果、「男性同士の友情」は約 45%と全体の半数近くにのぼったほか、「グループの絆」も約 35%と、それぞれ前節の異性愛言説よりも頻度が高いことがわかった。これらの言説は記事内でも特に目を引くように構成されることが多く、たとえばあるグループの一人が「ひとりで仕事するのって大変だなんて思うと同時に、メンバーってすごく大事だなんて思う。」と述べると、その発言を受けた別のメンバーが「俺も、ひとりのときこそ JUMP でよかったなんて思う。(……) “JUMP がなかったら、今の俺はないな” って思うんだよね。」(強調部分は、原文では大きなフォント・太字で記されている) と続ける(2012年11月号、29ページ)など、メンバー間の親密な関係を相互に認めあう言説を確認することができる。また、「いろんなことをふたりで乗り越えてきた。だから、なんか言葉はいらなくて。(……) 今は、ほかのメンバーもいるし、つかず離れずみたいなの、ホントいい距離だけど。アイツいなきや俺はいないし、俺がいなきやアイツはいないしね」(2012年12月号、146ページ)(強調は引用者)など、二者間の強固な関係や気のおけない間柄を表す言説も目立つ。

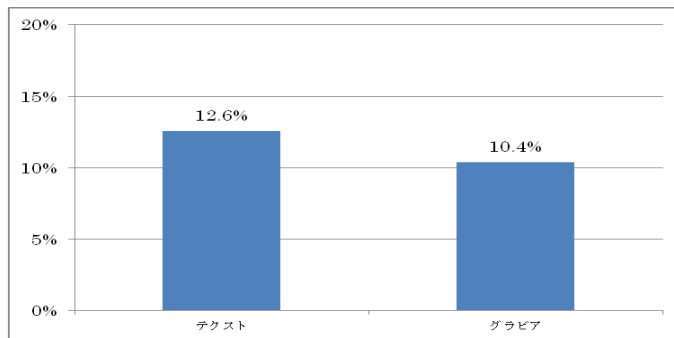
しかし、かならずしもポジティブな面だけが言説化されているわけではない。たとえば「最初、シカトされたこととかあったんですよ。(……) すごくさびしいな、やっつけてるかなって思った」(2013年1月号、138ページ)、また「そうこうしてるうちに、センターが代わるタイミングがあって。(……) すごく悔しかったですね。」(同左、140ページ)など、いじめにあった経験や他のアイドルにたいする嫉妬、あるいは学校になじめないことといったネガティブな言説も散見される。このような言説は、すでに CD デビューしたジャニーズアイドルが各号一人ずつみずからの研究生時代を振り返るといふ、インタビュー形式の連載記事にてよく言及される。ここで注意すべき点は、このようなネガティブさが表明されたのちに“このメンバ

一に出会えてよかった” “みんなで危機を乗り越えてきた” といった、所属するグループの他のメンバーとの親密さについての語りがみられるということである。つまり、アイドルが“真の発言”や“素の発言”をしているように構成された記事にて、まずはアイドル自身も完璧でカリスマ性のあるばかりではない、悩みや苦難を抱える一人の人間であるように描かれる。そのうえでネガティブからポジティブへと語りのベクトルが転換することで、“メンバーがいたことで苦難を乗り越えて CD デビューできた”と、男性同士の親密性と夢の実現が語られる流れとなるのである。

以上から、『Myjo』では同性同士の関係が異性愛よりも頻繁に言及され、いかにして男性同士で親密な関係を築いているか、あるいは男性同士の親密な関係とはどのようなものなのかが、読者にたいして積極的に言説化されているといえる。

### 3-3. 男性同士の“恋愛”言説

表 3 男性同士の“恋愛”言説（テキスト／グラビア）



最後に、男性同士の関係を“恋愛”的に読みとることが可能な言説を分析した。先述のとおり、東アジア圏の男性アイドル文化をみるうえで、同性同士の仮想恋愛言説の存在は決して無視できない。しかし先行研究の多くは、ファンがいかに同性間の親密さを“恋愛”に読み換えるかについてを論じるものであった。そこで本発表では、「ベストカップル」や「いちゃいちゃ」などのテキストやハートマーク、同性同士での抱擁やキスといった性的な意味を読み取れるグラビアなど、明確に“恋愛”関係を示す表現と判断できる記事に限定して分析した。

その結果、「テキスト」では約 12%、グラビアでは約 10%となり、1 割以上の記事で男性同士の“恋愛”が言説化されていることがわかった。とくにグラビアは、先述の「異性愛シチュエーション」と同数となっており、視覚表現として決して珍しいものではないということがわかる。この数値は、基本的には女性ファンにとっての異性愛の相手としての役目が想定されている男性アイドルという存在に、大きな変化が起きていることを示している。たとえば「ふたりの相方♥検定」という記事（2012 年 4 月号、49 ページ）では、記事タイトルにハートマークが挿入されているほか、「ケンカするほど、両思い。」「ラブトーク」と表記され、男性アイドル二人の親密な関係が“恋愛”関係に等しいものとして言説化している。

近年、コンサートやテレビのバラエティ番組などを通じて、ジャニーズアイドル同士による性的な接触をする様子が公開されることが珍しくない。そのため、『Myjo』上で男性同士の“恋愛”を示す記事が掲載されることは、むしろ驚くことではないとも考えられる。しかし本来、ジャニーズアイドル同士の関係を“恋愛”として読み換える行為は「J 禁」や「P 禁」と呼ばれ、女性ファン文化のなかではタブーとされており、厳格に不可視化されている（陳 2014）。それにもかかわらず、男性同士の“恋愛”を明らかに視覚化した表現が、男性アイドル文化を伝えるメディアのなかでも特に大きなものの一つである『Myjo』でなされていることはひじょうに興味深い。

## 4. 『Myjo』における〈恋愛〉と〈絆〉の様相

以上の数量的分析結果を踏まえ、本章では男性アイドルたちによって構築される〈恋愛〉と〈絆〉の様相について論じる。

〈恋愛〉面ではまず、アイドルの個性の多様性が提示されていることを指摘できる。たとえば「ファンのモーター」によって作られたという体裁の、アイドルと読者との疑似恋愛関係をテーマにした記事（2012 年 8 月号、40-45 ページ）では、メンバーそれぞれ個別に“キャラ”に見あったさまざまなシチュエーションでの読者とのデートが描かれる。また、アイドル同士で好みの女性のタイプを語り合う記事では「女のコの好みって、実際はそんなに似てない」という語りがみられ、アイドル自身も選ぶ女性はそれぞれ異なるのだと明示される（2012 年 4 月号、27 ページ）。同様の言説は他の記事でも確認でき、一部のアイドルのみに恋愛キャラが集中するのではなく、シチュエーションや好みのタイプが分散し差別化が図られることで、読者のニーズに細かく応えることができるような構成となっている。

また重要なのは、学校や家での出来事といったアイドルの“オフ”の演出である。先述したとおり、アイドルたちのプライベートについて言及する記事が多いが、それらでは学校生活を通じた友人とのやりとりや家族との関係といった、他愛のない日々の出来事が中心である。なかでも、2012 年 4 月号から始まった、毎号一人ずつ、ジャニーズ Jr.のキャラクターや私生活を紹介する連載コーナーでは、身長・体重といった身体の数値から一日のタイムスケジュールや私服・私物の紹介などが掲載

されており、“オフ”の姿の演出に際して大きな役割を担っているといえる。また、読者からの相談に“先輩”として答えていたり、自分自身の悩みや欠点を吐露したり、異性から“モテない”ことを表明する言説も珍しくない。つまり『Myjojo』上で構築されるジャニーズアイドルは、読者から手の届かない遠い存在としては描かれず、一般人と同じように学校に通い、友人との誼いやいじめ、あるいは失恋をも経験する、読者の立場に近い者として表象されているのである。

（絆）の面をみると、他の項目にくらべて「男性同士の友情」「グループの絆」「身体の接触」の頻度が高いことから、『Myjojo』の言説空間では女性（読者／ファン）の存在が“男同士の絆”の枠外に置かれていることを指摘できるだろう。たとえば、10代のアイドルたちがプールで遊ぶというシチュエーションの「オトナ禁制のわちゃわちゃプール大会」という記事（2012年10月号、86-87ページ）では、「オトナ禁制」という表現によって限定された空間が演出される。同時に、一つの浮き輪にアイドル4人が乗っている写真のキャプションには、アイドル同士の友愛関係の強さの証として「イチャイチャ」という表現が用いられており、彼らの視線はカメラ＝読者側を向いていない。つまり、こういった記事での読者は、アイドル同士の関係の内部には立ち入れず、彼らのやりとりをまなざす者としてのポジションにあることになる。

興味深いのは、このような男性同士の“恋愛”言説は、読者の要望にアイドルが応えるという構成で成立している点である。たとえば、読者のリクエストでアイドルたちがコスプレなどをする記事（2012年6月号、98-99ページ）では、「メンバー同士がじゃれ合っている姿は、見てて楽しいよね。」という編集部コメントのもと、“恋愛”関係にも読み取り可能な「チュロスゲームしてほしい」「ひざ枕してほしい」といった要望が読者からあったことが明示される。それに応えるアイドルたちはグラビアで表現されているため、読者はどこからも侵害されない立ち位置から、彼らの様子をながめることが可能となる。

また「濃密妄想 LOVE♥セクシーグラビア」（2012年8月号、5-12ページ）では、テキストではアイドルたちが理想の異性愛観を語っているにもかかわらず、グラビアでは男性同士の性的な関係をほのめかすポーズをとっている。しかも、「三角関係の恋」や「不実な恋」といった恋愛の規範においてタブーとされるものが「危うく甘美な妄想」と位置づけられている。ここでの「妄想」の主体に女性読者が想定されていることは明らかである。このように、男性同士の親密さや“恋愛”関係の表現は、『Myjojo』において一定の幅を占めるものである。

ただし、こういった記事では同性間の“恋愛”言説が異性愛言説と併記されていることに注意しなければならない。たとえば「LOVEにまつわるQ&A」（2012年6月号、75ページ）では、テキストでは「愛より相方を選びます♥」、グラビアでは男性同士で腕枕をするといった“恋愛”を表す言説がみられるにもかかわらず、本文のほとんどはアイドルが女性の好みを語るアンケート形式のものとなっており、男性同士の“恋愛”と異性愛とが混在して言説化されている。つまり、男性同士の“恋愛”は、冗談や演技、本気ではないものとして言説化されているのである。先述の記事に表記されていた「わちゃわちゃ」というネーミングは、見方によっては性的なニュアンスを含む身体的接触だが、その意味するものはじゃれあいやふざけあいであり、明らかな“同性愛”の一步手前に踏みとどまるものだけといえる。逆説的にいえば、男性アイドル同士が親密であればあるほど、その言説空間の背景には異性愛の価値観が横たわっていることになる。つまり、近年の男性アイドルグループの仲の良さを表現するタムとして頻出する「わちゃわちゃ感」とは、女性の存在を無化して男性同士の友愛関係と恋愛関係の境界を攪乱させつつ、しかし明確に男性同性愛となることを避けた、まさにセジウィック（1985=2003）が述べるような、男性ホモソーシャルにおける親密性を表したものだといえるだろう。

とはいえ、『Myjojo』の言説は異性愛規範を再強化するばかりのものではない。なぜならば、男性同士の“恋愛”言説がかならずしも二者間のみで構成されているわけではないからである。現代日本では恋愛・婚姻ともに一対一の関係として結ばれることが前提となっており、それ以外の他者との関係は“不義”とされることが一般的である。しかし、『Myjojo』では「コンビ」や「カップル」が多数のメンバーによって総当りの組み合わせられているほか、三名以上による“恋愛”関係が描き出される場合もある。つまり、固定的かつ絶対的な二者間の関係性ではなく、自由で流動的な関係性が描かれているのである。

また、男性アイドルたちがさまざまなスタイルで女性読者のニーズに応える言説空間においても、憧れの存在たる男性アイドルと女性ファンとの関係性はかならずしも従来の異性愛関係に則ったものではない。こういった言説の背景には、女性が積極的に男性を選びだす（あるいは“萌え”る）という、男性同士の友愛関係を愛でる視線が関係していると考えられる。前川直哉は、男性同士の“恋愛”を描く「やおい/BL」小説/マンガが1990年代に市場を拡大したことと、同時期に女性が主体となって男性をまなざすマスメディア上の言説が増加したことを関連させ、2000年代以降の「三次元の芸能界において「いちゃいちゃする」男性アイドルグループの姿が目立つようになった」ことを指摘する。そのうえで、「男性アイドル同士のいちゃつきぶりは、BLが大きな市場を獲得し、「見られる男性、見る女性」の構図の中で少なくない女性ファンが「男性アイドル同士のいちゃつき」を大好物としている時代の産物である」と述べる（前川2012, 144）。前川も注意しているとおり、もちろんこ

これは男性同性愛への理解や認知が広まったとか、女性が完全に異性愛での主体性を獲得したなどということではない。『Myojo』言説空間での男性同士の「恋愛」はあくまでも「妄想／モーソー」として位置づけられているし、アイドルたちが「好みの女性のタイプ」や「理想のデート」を語る形式が多くみられることから、それに読者がみずからを適合させていく可能性も十分ありえるからである。

しかし、女性を選びとる男性＝“王子さま”と選ばれる女性という従来のジェンダー役割は変質し、男性アイドルにたいして女性がさまざまな視線を（遠慮せずに）投げかけることが可能となっていることは明らかである。現在の男性アイドルは、女性にとって身近なレベルでの・自分の好みと合致させやすい存在であると同時に、自分と異性愛関係を結べない存在としても認識・構築されているといえるだろう。女性向けポピュラーカルチャーである男性アイドル文化は多様な視座と解釈とを可能にし、異性愛規範をラディカルに解きほぐす可能性をもつものといえる。

## 5. おわりに

今回は、2012年4月号から2013年3月号までの『Myojo』の分析を軸に、近年の男性アイドルにおける〈恋愛〉と〈絆〉との様相を考察した。現時点では確実なことは述べられないが、少なくとも2000年代以降の女性向けポピュラーカルチャーでは、さまざまなサブジャンルが相互に連動しながら総合的に変化していると予想できる。本発表では2012年度の『Myojo』に限定したが、本論のさらなる進展のためには、他の女性向けアイドル雑誌やテレビ番組・ラジオ・コンサートといった他のメディア空間、あるいは国内外ジャニーズ以外の男性アイドルとの比較などもおこなわなければならないだろう。また異性愛規範やジェンダー規範の多様性は、マンガ・アニメ・ゲームといった男性アイドル文化と関連する女性向け娯楽メディアにも目を向け、体系的に把握する必要がある。これらの視点を、今後の課題として記しておきたい。

## 補注

- 1 一般社団法人日本雑誌協会『マガジンデータ 2013 (2012年版)』より。
- 2 たとえば『Myojo』2005年6月号の表紙では、男性はジャニーズ事務所所属の滝沢秀明、女性はオスカープロモーション所属の上戸彩である。
- 3 なお、既存のグループに属していない「ジャニーズ Jr.」は、同様の立場にあるジャニーズ Jr. との中間意識を表す言説がある場合に分類した。

## 参考文献

- 1) 陳怡禎 (2014) 『台湾ジャニーズファン研究』青弓社。
- 2) 井上輝子+女性雑誌研究会 (1989) 『女性雑誌を解説する』垣内出版。
- 3) 前川直哉 (2012) 「「見られる男性、見る女性」の系譜——絡みあう二次元と三次元」『ユリイカ』44(15)、青土社、pp. 138-144。
- 4) 諸橋泰樹 (1993) 『雑誌文化の中の女性学』明石書店。
- 5) Nagaike, Kazumi. (2012), Johnny's Idols as Icons: Female Desires to Fantasize and Consume Male Idol Images, in Galbraith, Patrick W. and Karlin, Jason G., Idols and Celebrity in Japanese Media Culture, Palgrave Macmillan, pp. 97-112.
- 6) 落合恵美子 (1990) 「ビジュアル・イメージとしての女——戦後女性雑誌が見せる性役割——」女性史総合研究会編『日本女性生活史 5 現代』東京大学出版会、pp. 203-234。
- 7) 太田省一 (2011) 『アイドル進化論——南沙織から初音ミク、AKB48まで』筑摩書房。
- 8) Sedgwick, Eve Kosofsky (1985), *Between Men: English Literature and Male Homosexual Desire*, Columbia University Press. (上原早苗・亀澤美由紀訳『男同士の絆』名古屋大学出版会、2001.)
- 9) 田島悠来 (2013) 「雑誌『Myojo』における「ジャニーズ」イメージの受容」『Gender and sexuality: journal of Center for Gender Studies』(8)、国際基督教大学ジェンダー研究センター、pp. 53-81。
- 10) 辻泉 (2007) 「関係性の楽園／地獄 ジャニーズ系アイドルをめぐるファンたちのコミュニケーション」、東園子、岡井崇之、小林義寛、玉川博章、辻泉、名藤多香子共著『それぞれのファン研究 I am a fan』風塵社、pp. 243-289。
- 11) 吉澤夏子 (2012) 『『個人的なもの』と想像力』勁草書房。
- 12) 吉光正絵 (2012) 「K-POP にはまる「女子」たち——ファン集団から見えるアジア」馬場伸彦、池田太臣編著『「女子」の時代!』青弓社、pp. 199-227。